【冠婚編】

第 1 章　ホテルにおける結婚式の実態と意味

石井　研士

はじめに

現在の挙式・披露宴の在り方を創ってきたのは、挙式する当事者・関係者や地域社会ではなく、いわゆるブライダル産業である。結婚式の歴史をたどれば、明治 30 年代にキリスト教式に倣って創出され、大正時代になって上流階級に浸透していく。現在のように挙式・披露宴が一般的になったのは戦後とくに高度経済成長期になってからのことである。高度経済成長期に挙式・披露宴という場を提供したのは専門式場とホテルである。

作家の村上春樹が「結婚式場」を見学した文章を残している。書名は『日出ずる国の工場』（平凡社、1987 年）で消しゴム工場や CD 工場などいくつかの工場を見学したレポートである。結婚式場をレポートしたのは第２章で章名は「工場としての結婚式場　松戸・玉姫殿」である。文中には手書きの地図や建物の絵が掲載されているが、松戸に玉姫殿はない（なかった）。しかしながら実際に取材をしているので、創作ではないのだろう。

村上は「結婚式場は正確な意味での「工場」ではない」といいながら「工場以外の何ものでもないのだ」とも述べる（同書、47～48 頁）。理由は、工場のベルト・コンベアやコンプレッサーに言及されているように、「何組かの新婚夫婦が順次送り出されていくプロセス」にありそうだ。

村上は「僕はこのような「結婚式工場」的結婚式場のありかたを決して批判しているわけではない。それに対して皮肉っぽい思いを抱いているわけでもない。正直なところ、僕は〈松戸・玉姫殿〉に対してイエスでもノーでもない、いわば中立的な立場からこの文章を書いている。・・・しかし僕は最初にも言ったように、決してシニカルな目で〈玉姫殿〉（素敵なネーミングだ）を見ているわけではない」（48 頁）と繰り返し書くこと自体に問題の所在がありそうである。

話しは結婚を決めた二人が松戸・玉姫殿で担当者と会話しながら結婚の次第を進めていく形式で進む。それはベルト・コンベアで商品が次々とできあがっていくように、担当者の提示する選択肢を選ぶことで「結婚式」が成立している、と村上はいいたげである。章の最後は「そして二人はめでたく結婚しました。やれやれ。」（75 頁）で終わっている。

本当に結婚式は大量生産されているようなものなのだろうか。専門式場やホテルの担当者の提案に従って自動的にでき上がるようなお手軽な儀礼なのだろうか。担当者が提示する選択肢は、挙式する二人によって選ばれることで淘汰され、形を変えていく。神前式が少なくなり、チャペルウエディングが多くなったことも、ブライダル産業のしかけが一方的に成功したのではなく、式を希望する者と業界との間での創出と考えてもいいのではないだろうか。

結婚式のはじまりとその後の普及における組織の問題

結婚式は作られた儀礼である。どのように創られ、受容されていったのかを、戦後の状

況を把握する前に簡単に見ておきたいと思う。

いわゆる神前結婚式がいつ始まったかについては、いくつかの説が見られる。もっとも一般に流布している説は、明治 33 年の皇太子の神道式結婚式に影響を受けた人々が、明治 35 年に日比谷大神宮（現在の東京大神宮）において挙式したのが初めての神前結婚式である、というものだ。皇太子の結婚式が神道式で実施されたことには大きな意味があった。ロイヤルウエディングに対する関心の高さは、現在よりもなお高かったかもしれない。欧化主義一辺倒の中で、社会の上層部が後押しをする形で、神宮奉斎会は積極的な活動を展開したのであった。

明治 34 年 3 月 3 日と 5 月 24 日の二度、日比谷大神宮において模擬結婚式が行われた。3 月 3 日の模擬結婚式は、皇太子のご成婚式に影響を受けた細川潤次郎が考案したものであった。細川は従一位男爵で、枢密顧問官や貴族院議員を務めた人物である。細川はすでに明治 32 年に『新撰結婚式』で新しい結婚式を提案しており、模擬結婚式はこの様式によって行われたものである。

推進の母体は社会上層部であり、具体的な実行組織は神宮奉斎会、そして方式は伝統的な日本のやり方に則ったものでなくてはならなかった。村尾美江は、細川の考案した結婚式が礼法の水嶋流によるものだと述べている。水嶋流は小笠原流から分かれた流派で、水嶋流の松岡明義は幕末から明治にかけて礼法の権威と目された人物であったという。細川は水嶋流の結婚式を行ったにもかかわらず、松岡の名も、そして水嶋流も小笠原流の名も出さずに結婚式を行ったのであり、明治政府が推進する神前結婚式として世に出たと村尾は結論している。

そして翌明治 35 年 9 月 21 日、同じく日比谷大神宮において本物の神前結婚式が執り行われた。一般的に初めての神前結婚式といわれるのはこの結婚式である。当日の様子が報知新聞（明治 35 年 9 月 24 日）に掲載されている（南博編『近代庶民生活誌　第九巻』1986 年）。日比谷大神宮は神宮奉斎会の本院であった。

神前結婚式の普及

日比谷大神宮での神前結婚式以降、神前結婚式が広まったことを報じる記事が何点かある。明治 41 年 12 月 11 日付けの東京朝日新聞は、日比谷大神宮をはじめ神田明神、日枝神社、出雲大社支社その他の神社で神前結婚式を行う者がますます多くなってきたと報じている。日比谷大神宮が明治 34 年以来扱った縁組みは二千組に達したと報じている。大正 5 年に刊行された『風俗　一巻一号』で石井研堂は「今日にては大繁昌にて、吉日には一日に三組も五組もあり、一方は大神宮事務所と料理店大松閣及び写真師まで連絡が付き居り寧ろ俗化と思ふまでに便利に進歩せり」と記している。

神前結婚式を行うことのできる場所は確実に増加していった。昭和の初めには、神宮奉斎会本部と支部、乃木神社、永島式婚礼会、出雲大社系の神社教会、天満宮、平安神宮、湊川神社で行われているという記事がある（「新時代縁談と婚礼一式并結婚生活」『婦人倶楽部』新年号、昭和 6 年）。中には神前結婚式は「都会地で最も多く行はれる結婚式です」という雑誌も見られる（『婚礼画報』『主婦の友』3 月号特別付録、昭和 6 年）。

ホテルでの結婚式の始まり

帝国ホテルは、明治 23 年の開業当初から結婚披露宴の会場として利用されていたことが分かっている。明治 25 年の毎日新聞には法学博士穂積八束の結婚披露宴の記事が掲載されている。穂積博士はこのたび深川セメント社長令嬢マツ子と結婚したので、9 月 28 日に朋友知己を帝国ホテルに招待して婚姻の披露をすることになったという（毎日新聞、明治 25 年 9 月 24 日）。明治後半になると「帝国ホテルでの結婚披露宴は非常に多くなり、帝国ホテルはこの分野での草分けとなった。」（『帝国ホテル百年史』帝国ホテル、1990 年、76 頁）日本初の本格ホテル、帝国ホテルと日比谷大神宮は距離的に近く、日比谷大神宮で挙式し、帝国ホテルで披露宴を行う人々が現れたのである。

こうして結婚式・披露宴は大正時代になってますます拡大していき、華族会館、東京会館、築地精養軒、上野精養軒、水交社（築地、明治 9 年に創立された海軍部内の修養・親睦団体）、如水会（神田一橋）、偕行社（九段、明治 10 年に創立された陸軍将校の修養・親睦団体）、帝国ホテル、東京ステーションホテルなどで行われるようになった（『帝国ホテル百年史』287 頁）。精養軒は明治 5 年に三条実美や岩倉具視の援助により築地に「精養軒ホテル」として開業したのが始まりで、明治 9 年に上野公園開設に伴い不忍池畔に西洋レストランを設けた。同社のホームページには「大正 9 年には結婚式場の先駆として神殿を新設し、披露宴や様々なレセプション会場としても多くの知名人にご利用を賜り」とある。東京ステーションホテルについては後述するが、どれも上流の人々の利用する施設である。

帝国ホテルの結婚式

ホテルでの結婚式は、きわめて都合がよかったにちがいない。ふつうの人々がこぞってホテルで結婚式を行うことができるようになるのはもうしばらく後のことになるが、金銭に余裕のある人々や社会的地位の高い人々にとっては、神社で挙式し、その後ホテルで披露宴を催すのは、ステータスであったようだ。先に『帝国ホテル百年史』から引用した施設で、結婚式に関する資料が残っているのは帝国ホテルだけである。

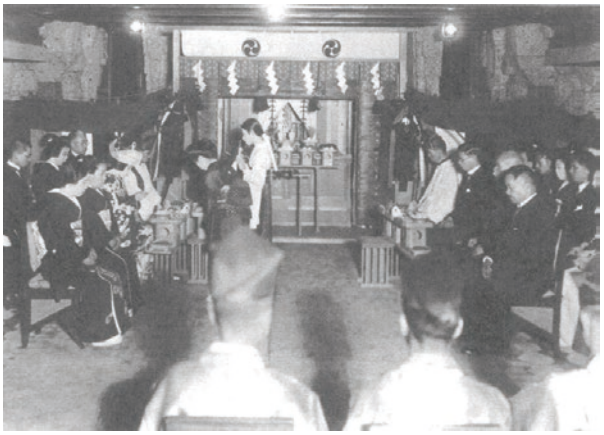


写真　大正時代の帝国ホテルでの挙式

写真の注には「「ライト館」の誕生を機に、ホテル内神前挙式場が造られた」とある。「ライト館」は大正 12 年に完成した帝国ホテル 2 代目本館の通称である。両端の壁を見ると、ライト館の石組がそのまま見える。帝国ホテル内での挙式は、ライト館に挙式のため

の特別なスペースが用意されていなかったので、永島式婚礼により、その都度しつらえられたと考えられる。帝国ホテル内のどこで行われていたのかはわからない。形式はほぼ現在の挙式と同じである。

大正 12 年 9 月 1 日、関東大震災によって、日比谷大神宮や華族会館など、多くの神社、披露宴会場が倒壊もしくは焼失してしまった。こうした状況下で、帝国ホテル支配人犬丸徹三は新しい慶事サービスの可能性を探っていた。震災の被害が軽かった帝国ホテルのバンケットホールは、当時の最高の結婚式、披露宴会場として注目を集めることになった。折しもライト館を竣工していた時期であり、永島式結婚式が好評を博しているのを知っていた犬丸は、ホテル内で結婚式と披露宴をセットにして提供するという新しいサービスを考え出したのであった（『IMPERIAL』NO.10、1995 年）。永島式婚礼会を中心にして、ホテルの美容師と写真館を組み合わせて、現在のホテルでの結婚式の原型が作り上げられていった。

写真　大正 9 年（1920）に開かれた結婚披露宴（『帝国ホテル　写真でみる歩み』）

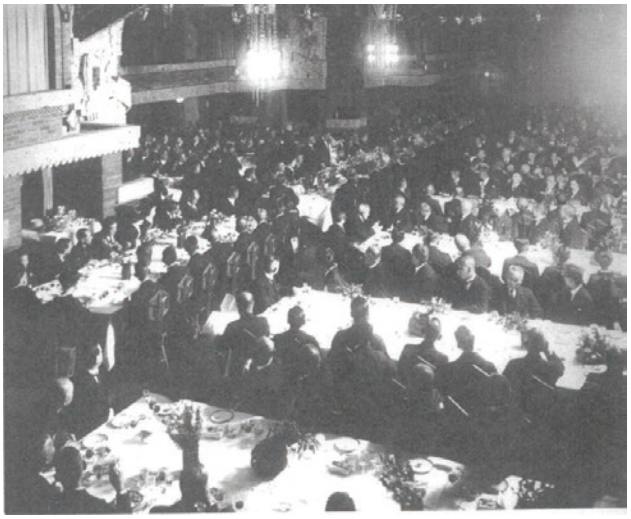


写真　大正 14 年（1925）に「孔雀の間」で開かれた結婚披露宴

上の写真は大正 9 年に開かれた結婚披露宴のものである。関東大震災前のホテルでの披

露宴になる。写真中央上部に、新郎新婦、仲人と思われる人物が写っている。テーブルの上には「花」というよりはお花が生けられている。最初の挨拶なのだろうか、他に装飾やウエディングケーキなどは見えない。女性はすべて着物である。

下の写真は、関東大震災後に再建されたライト館での結婚披露宴である。「孔雀の間」は帝国ホテルでもっとも大きな宴会場である。中央上部の柱の元で立っているのが新郎新婦であろう。大正 14 年にこれだけ大規模な披露宴を帝国ホテルで開くことのできる人物は、当時の上層部に属する者と考えられるが、氏名等は記されていない。

さらに犬丸は大正末期になってホテルでの結婚式にいっそう力を入れることになった。館内に滋賀県の多賀大社を分祀して式場を常設し、多賀大社祭神のお札を配った。（『帝国ホテル百年の歩み』99 頁）こうして帝国ホテルでは、「帝国ホテルのゆとりのサイズ、もてなしの心、ほかにはない帝国ホテル独自の演出、自慢の料理が評判となり、結婚式、披露宴は多忙をきわめるようになる」（犬丸徹三『ホテルと共に七十年』1964 年、展望社、287～288 頁）。年間千件以上の式を行うことも珍しくなかったという。帝国ホテルの文献には、「独自の演出」がどのようなものであったのかは記されていない。

帝国ホテルは大正 14 年に、帝国劇場との間で東京会館の賃貸契約を結んだ。東京会館は大正 9 年に建設された地上 5 階地下 1 階の建物で、地下の連絡通路で帝国劇場とつながっていた。大正 12 年の関東大震災で自力復旧が困難となり、帝国ホテルとの間に契約が結ばれたのであった。東京会館の 5 階には結婚式場が設けられていた。ここにも帝国ホテルと同じく多賀大社を分祀し、結婚式は一切を永島式婚礼会が仕切ったという（『百年史』348 頁）。東京会館での結婚式は、帝国ホテル同様に繁盛したらしい。結婚披露宴をはじめとする宴会部門の売り上げが全体の八割を占めた（『帝国ホテル百年の歩み』349 頁）。

しかし当時、帝国ホテルはふつうの人は恐れ多くて足を踏み入れることが出来ないような高級ホテルだった為に、その頃の結婚式利用者は結局、華族や一流実業家などの上流階級の人に限られていた。当時のメニューを見ると、庶民とかけ離れた様子が理解できる。

大正五年の披露宴メニュー（361 頁）

一、御つまみもの
一、鼈スープ
一、鯛むしやき　ソース
一、鶏肉マヨナイズソースよせ
一、牛背肉　野菜
一、洋うど　クリームソース
一、七面鳥ロースト
一、蟹サラダ
一、ウイデイングケーキ
一、苺アイスクリーム
一、果実各種
一、コヒー

昭和二年の披露宴メニュー（寺田・松木両家結婚式披露宴）

一、オードブル
一、スープ
一、伊勢海老　マヨネーズソース
一、牛繊肉　野菜
一、七面鳥　ロースト
一、サラド
一、アイスクリーム
一、果実　コーヒー

帝国ホテルでの披露宴料理はオーソドックスなフランス料理だったが、大正後期からタイ、伊勢エビを取り入れた婚礼メニューが加わった。

都ホテルと目黒雅叙園

ホテルでの披露宴が一般化すると、当然ながら披露宴と挙式を同じ場所でできないか、という発想が生まれる。こうした方向性に機敏に反応したのは、神社界ではなくホテル側であった。京都ホテルでは大正 15 年に大改修を発表し、昭和 3 年に新館を完成させているが、新館の中には結婚式場が設けられていた（『京都ホテル百年ものがたり』京都ホテル、1988 年、326～327 頁）。昭和 9 年には目黒雅叙園が結婚式場を館内に完成させ、昭和 10 年に新築された新大阪ホテルと名古屋観光ホテルにも結婚式場が組み込まれていたことが分かっている。近代的な巨大ホテルや会館にはこの頃から挙式場が設けられていったようだ。

目黒雅叙園は社史を発行していないが（『時の流れ　目黒雅叙園』が刊行されているが、施設の図版を収録したもので、歴史的な経緯や活動の記録は記されていない）、ホームページには歴史的な経緯が一部記載されている（https://www.hotelgajoen-tokyo.com/wedding）。

目黒雅叙園は 1931 年（昭和 6 年）に細川力蔵によって開業された料亭を初めとする。ホームページでは「日本初の総合結婚式場」を謳っている。「当時、結婚式といえば美容室、写真室、神社での挙式を経て、料亭やホテルへ移動するスタイルが主流でした。 新郎新婦や親族、参列の方達は次々と時間に追われ、特に雨の日は大変な苦労がありました。 そこで、かけがえのない大切な一日をゆったりと過ごして頂くため、出雲大社より御霊をお迎えし、神殿・衣裳室・ 美容室・宴会場を作り、日本初の総合結婚式場としての歴史がはじまったのです」（ホテル雅叙園東京ホームページより）。昭和 13 年には「料理はもちろん、数百帳の着物やかつら、モーニングなどを取り揃え、写場や美容室を設えて、一貫して結婚式ができるシステムを整えました」（同）という。結婚式を念頭に施設を構築したという点では、日本初かどうかは別として、きわめて早い事例であった。

当時の神殿、神殿での挙式、披露宴の写真がわずかではあるが公開されている。

写真　神殿

写真　神殿前の挙式

帝国ホテルが当時の一部の上層部の人々による利用であったのに対して、目黒雅叙園はより一般的な利用に供していたものと考えられる。当時の本館には著名な木造建築「百段階段」沿いに「十畝の間」、「漁樵の間」など 7 つの座敷棟宴会場が設けられた。

写真　披露宴会場（部屋名は不明）

披露宴会場は、写真でわかるように、座敷の宴会場であって、かつテーブルが円形になっている。細川力蔵が披露宴で客が料理を取りにくそうにしているのを見かねて新たに考案した回転テーブルである。披露宴という新しい形態の宴会の発生に関しては、新しい試みがすでに昭和初期から行われていたのではないかと考えられる。

ところで形式であるが、挙式は永島式にしろおおよそ神宮奉斎会が創り上げて様式を模していたであろうと思われる。それほど多くのバリエーションがあったとは考えられない。披露宴はどうだろうか。料理に関しては、帝国ホテルがフランス料理であり、目黒雅叙園では中華料理が提供可能であった。現在披露宴で一般的に見られる趣向に関しては、まったく記述がみあたらない。キャンドルサービス、ケーキカットなどが行われるようになるのは戦後、とくに高度経済成長期になってからのことである。

クラシックホテル

戦前に開業して今日まで存続しているホテルを「クラシックホテル」と称することがある。（「日本クラシックホテルの会」が平成 29 年 11 月に設立されている）これらのホテルは、帝国ホテルやホテル雅叙園東京、都ホテル、東京ステーションホテルのように、いつの頃からはべつにして、結婚式場を備え、披露宴を行ってきた。これらのホテルの記録を精査することで、結婚式がどのように創られてきたのかが理解できると考えられる。

以下は、クラシックホテルの一覧である。建物の改築、名称変更、運営母体が変わるなどしてきたが、日本人の間である種のオーラを放つホテル群である。こうしたホテルは歴史が長いこともあって、社史を刊行している事例が多い。網掛けは社史と思われるものが存在するホテルである。

クラシックホテル一覧

日光金谷ホテル 1873 年（明治 6 年）6 月開業　栃木県日光市
富士屋ホテル　1878 年（明治 11 年）7 月 15 日開業　神奈川県足柄下郡箱根町
帝国ホテル　1887 年（明治 20 年）　東京都千代田区
万平ホテル　1894 年（明治 27 年）7 月 1 日開業　長野県北佐久郡軽井沢町
奈良ホテル　1909 年（明治 42 年）10 月 17 日開業　奈良県奈良市
東京ステーションホテル　1915 年（大正 4 年）11 月 2 日開業　東京都千代田区
ホテルニューカマクラ　大正中期開業　神奈川県鎌倉市
宝塚ホテル　1926 年（大正 15 年）5 月開業　兵庫県宝塚市
ホテル・ニューグランド　1927 年（昭和 2 年）12 月 1 日開業　神奈川県横浜市
京都ミヤコホテル　1927 年　京都府中京区
蒲郡クラシックホテル　1934 年（昭和 9 年）3 月 1 日開業　愛知県蒲郡市
アンワインド ホテル&バー小樽　1931 年（昭和 6 年）開業　北海道小樽市
雲仙観光ホテル　1935 年（昭和 10 年）10 月 10 日開業　長崎県雲仙市
川奈ホテル　1936 年（昭和 11 年）12 月 6 日開業　静岡県伊東市
十和田ホテル　1939 年（昭和 14 年）8 月 3 日開業　秋田県鹿角郡小坂町

上記で網掛けをしたホテル以外で社史の存在が明らかになったホテルは以下の 21 ホテルである。これらの社史は市販されている通常の本とは異なり、発行部数・配布先が限定された非販売の出版物であることが多い。

ホテル小田急
静岡中島屋ホテルチェーン
沖縄都ホテル
パレスホテル
京都ホテル
倉敷国際ホテル
札幌グランドホテル
東急ホテルズ

新阪急ホテル
東急ホテルチェーン
札幌パークホテル
名古屋観光ホテル
国際観光ホテルナゴヤキャッスル
パレスホテル
琵琶湖ホテル
ホテルオークラ
ホテル松多屋
都ホテル
山の上ホテル
第一ホテル
ロイヤルホテル

今回調査した、クラシックホテルも含めたホテル関係の社史は以下の一覧の通りである。

ホテル社史　一覧

ホテル小田急社史編集事務局『あとりうむ』ホテル小田急、２００９
岩手県旅館ホテル生活衛生同業組合『いわての観光と宿』岩手県旅館ホテル生活衛生同業組合、２００８
静岡中島屋ホテルチェーン『笑顔カンパニー』静岡中島屋ホテルチェーン、２００６
沖縄都ホテル２０年史編集委員会『沖縄都ホテル２０年史』沖縄都ホテル２０年史編集委員会、１９９４
パレスホテル『株式会社パレスホテル５０年のあゆみ』パレスホテル、２０１３
京都ホテル『京都ホテル１００年ものがたり』京都ホテル、１９８８
倉敷国際ホテル『倉敷国際ホテル５０年の歩み』倉敷国際ホテル、２０１３
札幌グランドホテル『札幌グランドホテルの５０年』三井観光開発、１９８５
交通科学博物館『山陽ホテル記録誌』交通科学博物館、２０１１
東急ホテルズ『承景』幻冬舎メディアコンサルティング、２００７
新阪急ホテル２５年史編纂委員会『新阪急ホテル２５年史』新阪急ホテル、１９９２
宝塚ホテル『琥珀色の時間』宝塚ホテル、１９８６
宝塚ホテル『宝塚ホテル６０年の歩み』宝塚ホテル、１９８６
帝国ホテル『帝国ホテル百年の歩み』帝国ホテル、１９９０
帝国ホテル『帝国ホテル百年史』帝国ホテル、１９９０
帝国ホテル『帝国ホテル写真で見る歩み』帝国ホテル、２００３
帝国ホテル『帝国ホテルの１２０年』帝国ホテル、２０１０
東急ホテルチェーン『東急ホテルの歩み』東急ホテルチェーン、１９９０
日本ホテル株式会社『東京ステーションホテル６０年の歩み』日本ホテル、１９７５
日本ホテル株式会社『東京ステーションホテル６５年の歩み』日本ホテル、１９８０
ジェイアール東日本企画『東京ステーションホテル物語８０年史』日本ホテル、１９９５

日本ホテル株式会社『東京ステーションホテルのあゆみ』日本ホテル、２０１６
中西章一『中島公園のほとりで・札幌パークホテル二十年のあゆみ』三井観光開発札幌パークホテル、１９８５
名古屋観光ホテル『名古屋観光ホテル五十年史』名古屋観光ホテル、１９８６
国際観光ホテルナゴヤキャッスル『名古屋城のほとりで』国際観光ホテルナゴヤキャッスル、１９８７
日本ホテル協会『日本ホテル協会百年の歩み』日本ホテル協会、２００９
パレスホテル『Ｐａｌａｃｅ　Ｈｏｔｅｌ　１０年の歩み』パレスホテル、１９７０
パレスホテル『パレスホテルの２０年のあゆみ』パレスホテル、１９８０
奈良ホテル企画部「奈良ホテル物語」編集室『奈良ホテル物語』奈良ホテル、２００１
奈良ホテル『百年のホテル』奈良ホテル、２００９
琵琶湖ホテル『琵琶湖ホテル五十年のあゆみ』琵琶湖ホテル、１９８４
福島市旅館ホテル組合『福島市旅館ホテル組合史』福島市旅館ホテル組合、１９８６
富士屋ホテル株式会社『回顧六十年』富士屋ホテル、１９３８
富士屋ホテル１３０周年実行委員会『１３０年の贈り物富士屋色の時間』富士屋ホテル、２００８
富士屋ホテル仙石ゴルフコース『富士屋ホテル仙石ゴルフコース１００年史』富士屋ホテル、２０１７
富士屋ホテル株式会社『富士屋ホテル１４０周年記念誌　第１巻』国際興業グループ富士屋ホテル、２０１８
富士屋ホテル株式会社『富士屋ホテル１４０周年記念誌　第２巻』国際興業グループ富士屋ホテル、２０１８
富士屋ホテル株式会社『富士屋ホテル１４０周年記念誌　第３巻』国際興業グループ富士屋ホテル、２０１９
「二十周年記念行事委員会」社史編纂分科会『ホテルオークラ二十年史』大成観光ホテルオークラ、１９８２
「ホテルオークラ事業史」編纂委員会『ホテルオークラ』ホテルオークラ、１９８８
白土秀次『ホテル・ニューグランド５０年史』ホテル・ニューグランド、１９７７
ホテル・ニューグランド八十年史編集委員会『ホテル・ニューグランド八十年史』ホテル・ニューグランド、２００８
ホテル松多屋１００周年記念誌制作委員会『ホテル松多屋の１００年』ホテル松多屋、２０１０
万平ホテル『万平ホテル物語』万平ホテル、１９９６
大槻喬『都ホテル沿革史』都ホテル、１９５１
都ホテル『都ホテル１００年史』都ホテル、１９８９
森裕治『山の上ホテルの流儀』河出書房新社、２０１１
第一ホテル『夢を託して』第一ホテル、１９９２
ロイヤルホテル『ロイヤルホテル創業５５周年記念誌』ロイヤルホテル、１９９０
ロイヤルホテル『リーガロイヤルホテル７０年の歩み』ロイヤルホテル、２００５

挙式場所の変化

戦後のホテルでの結婚式の在り方を見るためにも、挙式場所がどのように変化していったかを把握しておきたいと思う。この点に関してはいくつかの調査がある。

色川大吉が具体的な調査を行っている（色川大吉『昭和史世相編』小学館、1990 年。初出は『春秋生活学』第 5 号、小学館、1989 年）。色川は「婚礼の形式も、1960 年代を境として、大きく変貌したといわれながら、実際にそれを調査した報告は意外に少ない」として、婚礼調査を実施した。調査は、色川が所属する大学のゼミの学生 26 名に対して、両親の結婚当時の状況を聞き取り調査をさせたものである（実際の分析対象は 23 組）。調査はアンケート調査で、基本項目、結婚にいたる経緯、式の当日、式の後の四つに分かれて合計 28 問からなっている）。

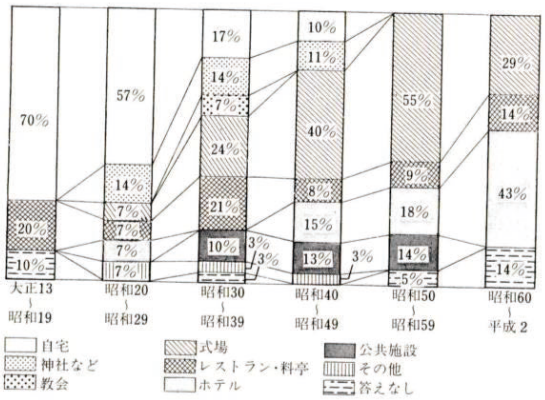
学生の両親は大多数が昭和 38 年から昭和 43 年の間に結婚していた。挙式の形態は、9 割が神前式であとの 1 割ほどがキリスト教式であったという。挙式のスタイルを選択した理由は質問されていない。

昭和 38 年は東京オリンピックの前年であり、昭和 43 年までの 6 年間は昭和元禄の開花にいたる 6 年間であるという。昭和 43 年には日本はドイツを抜いて世界第 2 位の GNP を誇るようになる。同時にこの時期結婚式をあげたカップルは、60 年安保世代から昭和 43・44 年の全共闘世代の若者たちで、「安保闘争、反軍事基地闘争、ベトナム反戦運動、ビートルズ旋風、グループ・サウンズ、反公害・自然保護等の市民運動、全国を揺るがした学園闘争など、彼らが主役になった運動は枚挙にいとまがない。」回答から見られるカップルはきわめて自立志向が強く、「当時の式の意味をどう考えるか」という問いに対して「簡素であっても、今のような大金をかける結婚式とは違って、本質を追究できたことに満足している」と答えている」という。

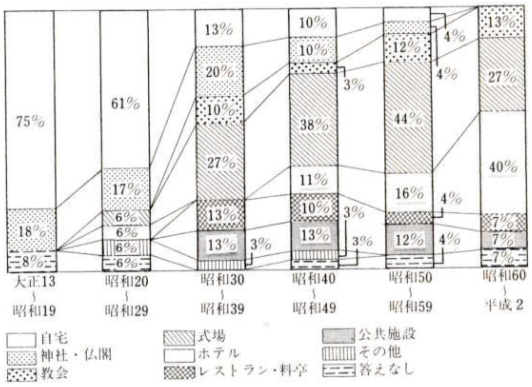
色川の調査はわずかに 23 組によるものであるが、その時期に結婚した人々の意識は、時代のせいか、きわめて積極的で、儀礼の決め方についてもいちじるしい自主性がめだつ、それは現代の若者一般よりはるかに進歩的であるといえる、と色川は述べている。そうだとすると、なぜ進歩的で積極的で自主性のめだつ若者が神前結婚式を選択し、結婚式の「本質を追究できた」とするのだろうか。当時の若者が選んだ神前式の意味とはいったい何だったのだろうか。残念ながら色川は、神前式が九割という事実と、若者の時代的性格との関係には言及していない。

志田基与師も色川と同様に、大学の講義の受講生に対して「結婚式・結婚披露宴の儀礼に関する調査」を実施している（志田基与師『平成結婚式縁起』東洋経済新聞社、1991 年）。回収数は 167 通であった。著書にはアンケートに関して、調査対象に関する基本的項目、調査時期、質問項目一覧等、集計結果は掲載されていない。

志田の調査結果を図示すると次のようになる。左図が披露宴会場、右図が挙式形式になる。



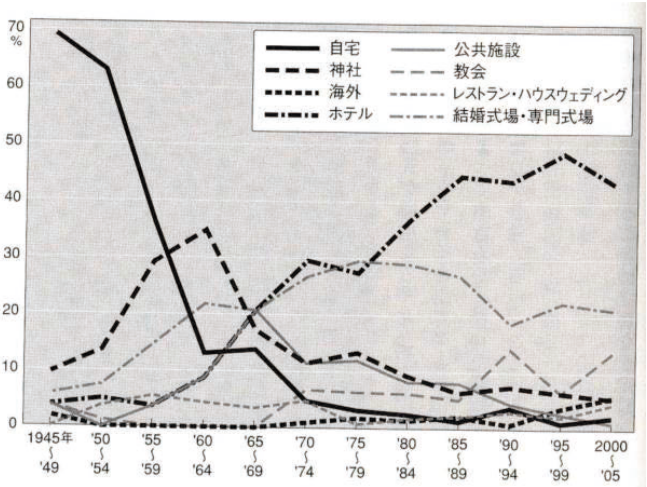
披露宴会場



挙式場（形式）

次に示すのは石井が平成 16 年と 17 年に実施した調査結果を図示したものである。調査は講義を受講した学生に対するレポートの形式で実施した。学生は、両親など三件の結婚式に関してインタビューを行い結果を報告した。アンケートの内容は、結婚した年、挙式様式、挙式様式を選んだ理由、挙式の様式を決定した人、挙式を行った（具体的な）場所である。

戦後の挙式場所の変化



志田の挙式様式の変化に関するふたつの図と石井の挙式場所の変化に関する図から、戦後から現在までの結婚式の変化を把握することが可能となる。

戦後の昭和 20 年代、結婚式は家で行われるのが一般的であった。戦後の挙式形態を見ると、神前式の割合が高く、自宅での結婚式を意味する人前式は神前式よりも下回っている。昭和 20 年代の神前式という回答は自宅での人前式と混同されたものと考えることができる。

昭和 20 年代後半から 30 年代半ばまで、神社での挙式が増加していく。しかしながら神前式の実施割合は、神社での挙式をしだいに大きく上まわるようになる。神社での挙式は「1960～1964 年」をピークにして、以後減少に向かう。そして神社での挙式の減少とは裏

腹に、神前式結婚式は急増する。神前結婚式は、挙式場所を神社から結婚式場・専門式場やホテルへと移していく。

神前式の実施割合が緩やかに減少を始めたのは 1980 年代半ば頃からで、1990 年代になって、減少傾向は決定的となった。当然ながら挙式が減ったのは神社での結婚式ではなく、結婚式場・専門式場やホテルでの神前結婚式である。

神前結婚式が減少を始めた 1990 年代から、神前結婚式の減少と相反するかのように増加していき、1990 年代半ばで、神前結婚式の実施率とチャペルウエディングの実施率は交差するまでになった。現在チャペルウエディングは、海外でのチャペルウエディングを含めて、70 パーセントを超える結婚式の主流となっている。

以上の分析からも、日本人の「結婚式」を創ってきたのは結婚式場・専門式場、ホテルである。とくに高度経済成長期での結婚式の重要性を考えたときに問題となるのは「ホテル」ではなく「結婚式場・専門式場」である。

ホテルでの結婚式

上記のことを踏まえた上で、先に挙げたホテルの社史から結婚に関する記述を拾い上げてみたいと思う。まず概要であるが、これら 17 冊の社史の中で結婚、ブライダルに関する記述を探してもほとんど見い出すことができない。戦後の結婚式におけるホテルの重要性、ホテルの料飲部門もしくは宴会部門における披露宴の重みを考えたときに、記述のないことを理解するのは困難である。

多くの社史の中心的な内容は、施設の建設と拡充、来賓（皇室、海外の要人、国内外のスター）の来訪、そしてサービス内容（宿泊、宴会）であり、結婚式関係はその一部となる。加えて、社史であるから、客観的な論述であるよりは社会に対して自社の歴史を語るのであり、不必要な事実は掲載されていない。それでも「結婚式」に関する記述があれば、それはホテルが表現したい何物かであり、十分な意味があるだろう。

以下、社史に結婚式関係について記述のあったホテルを順に取り上げ、該当部分を概説することにしたい。

＜ホテル小田急＞

ホテル小田急の社史に結婚に関する記述が掲載されるのは平成 8 年のことである。ホテルの開業が昭和 55 年の新宿副都心であるが、昭和 55 年から平成 8 年の間についてはわからない。記事は「ミニブライダルフェア始まる」である。

ブライダルのニーズがますます多様化、個性化、低価格志向になってきており、春・秋年 2 回のブライダルフェアに加えて「ミニブライダルフェア」を適宜開催するという。通常のブライダルフェアの内容も、披露宴メニューやテーブルコーディネートも見せる、婚礼衣装も展示だけでなく試着してポラロイドカメラで見せる、美容相談コーナーの設置などが列挙されている。「新しいウェディングプランの開発等により、婚礼収入の増加につながっていきました」（93 頁）と記されている。

平成 9 年には館内のチャペルと宴会場のリニューアルオープンが掲載されている。ウエディングの販売力強化のため 5 階ブライダル専用フロアのチャペルを改装している。開業が昭和 55 年であるから開業 17 年後の改装になる。改装のポイントは座席数の増加（72 席へ）のようだが、他にも柔らかな照明とふんだんな木材利用、ホワイエから聖壇までの長いバージンロードを白い大理石へ

平成 9 年の改装時のチャペル

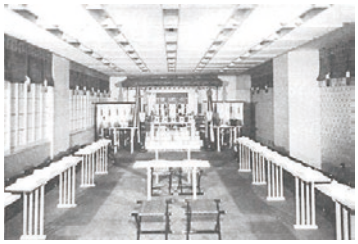
と変えエレガントさの強調であるという。宴会場の改装のポイントもチャペルと基調は同じで、木をふんだんに使い壁には書棚風のインテリアを施し邸宅に招かれたような雰囲気の構築にありそうである。具体的な装置としては、遮音性の高いダブルパーティションや電動昇降スクリーンの設置が記されている。チャペルにしろ披露宴会場にしろ、築年数と時代状況に合わせた改装である。

社史に記された結婚式関係の記事の最後は平成 16 年「ブライダルフロアを改装」である。先の改装が平成 9 年であるから、7 年後に開業以来二度目の改装ということになる。チャペルの壁面を木調に変更、神殿には障子を入れた。照明類も落ち着いた雰囲気に変更した。記事には改装の理由については触れられていない。平成 9 年の改装後もブライダル部門は期待ほど収益が増えなかったのだろうか。あるいはこの時期のブライダル業界にかなりの変化があったのか、理由の所在は明らかにならない。

平成 16 年の改装時のチャペルと神殿

＜パレスホテル＞

パレスホテルの二冊の社史には、結婚式に関する記述は見られない。しかし、10 年史にも 20 年史にも神殿の写真が掲載されている。白黒とカラーの差はあるが、照明も壁面も神殿自体も変わっているように見えない。なによりもチャペルに関する記述がない。『パレスホテルの 20 年のあゆみ』は 1980 年に刊行されており、その後の設置になるのではないか。

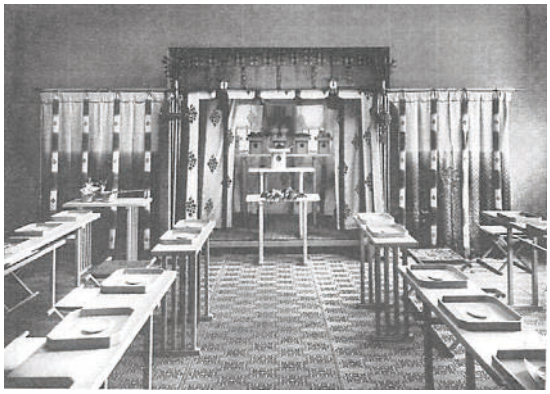


『Palace Hotel 10 年の歩み』

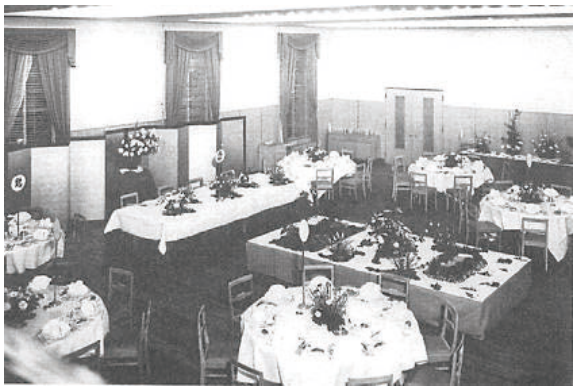
『パレスホテルの 20 年のあゆみ』

＜東京ステーションホテル＞

東京ステーションホテルは大正 4 年に創業されたクラシックホテルである。社史に当たるものが複数刊行されているが、結婚に関する文章は見当たらない。平成 28 年に刊行された『東京ステーションホテルのあゆみ』に結婚式場と大宴会場の 2 枚の写真が掲載されているだけである。



2 階結婚式場



2 階大宴会場

結婚式場の写真には「小宴会場を神前式結婚式場として使用していた。現在は 2 階のバックヤードになっている」と記されている。見るからに部屋に神前式のための箱を置いた、といわんばかりの設営である。大宴会場の写真には「結婚披露宴用に設営された。後の宴会場「牡丹」。現在は、2 階のバー＆カフェ「カメリア」からレストラン「ブランルージュ」への回廊、「すし青柳」などとなっている」と記されている。改装される前の様子だが、改装後の説明や写真は掲載されていない。現在、東京ステーションホテルのホームページにはウエディング専用サイトが設けられている。神前式だけでなくチャペルウエディングも可能であることがわかるようになっている。社史を会社の顔とすれば、「顔」とブライダルのホームページとの差が問題である。

＜名古屋観光ホテル＞

名古屋観光ホテルは昭和 11 年に開業した名古屋最古のシティホテルである。『名古屋観光ホテル五十年史』（1986 年）は高度経済成長期に刊行された社史であるが、結婚式に関する記載は見られない。昭和 30 年代の記述の中に当時の結婚式場と婚礼披露宴に関する 2 枚の写真が掲載されている。神前式はとくに際だった特徴は見られない。披露宴会場であるが、参加者が万歳をしているように見える。昭和 30 年代の披露宴で万歳をする慣習があったのだろうか。

＜札幌グランドホテル＞

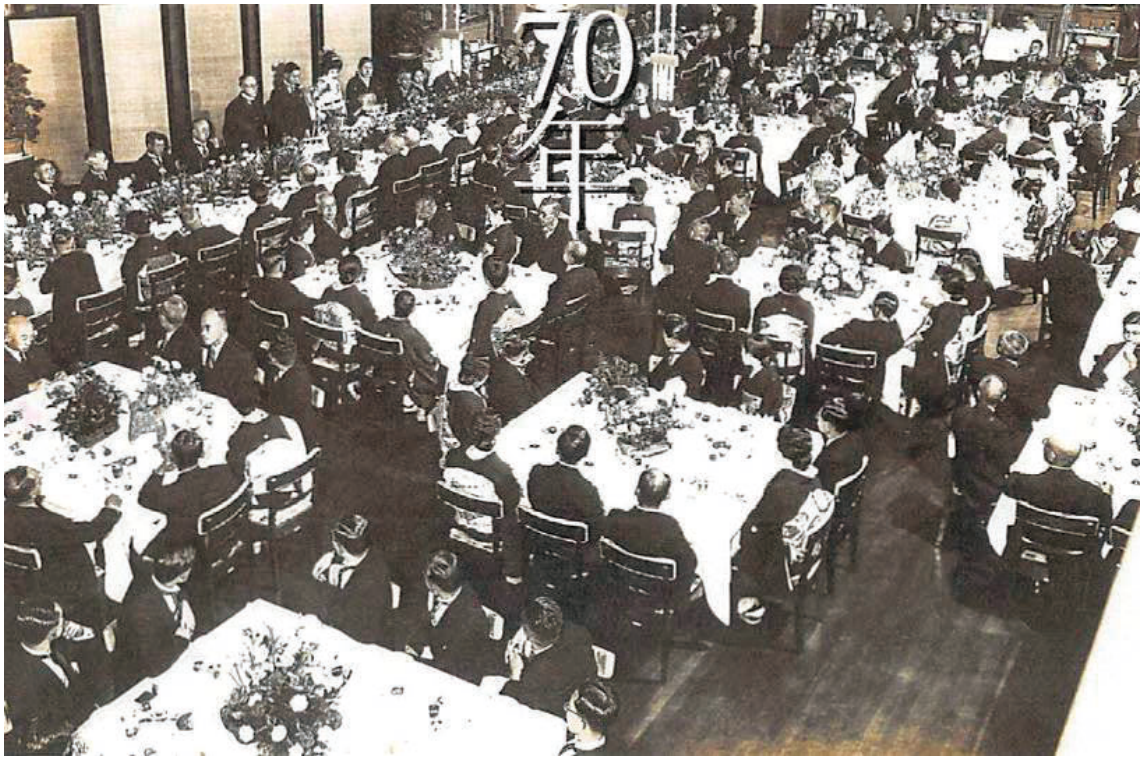
札幌グランドホテルは、戦前の昭和 9 年に北海道内初の本格的な洋式ホテルとして開業した。『札幌グランドホテルの 50 年』（1985 年）に記された結婚式は、開業当初に「北海タイムス」に掲載された記事に関するものだけである。記事は「この二、三年札幌では神前結婚が非常に流行ったものだが、今度グランドホテルが出現したところ、神前結婚なんて近代的じゃない･･･とあって、にわかに若い男女がホテル結婚へと、華々しく転向し、結婚行進曲を奏している。神前結婚だと、結婚式と披露宴を別々にやらなければならないが、ホテルでの結婚は、式も披露も同じ場所でやれるし、その上ハネムーンはホテルのベッドで･･･と、いとも安直に何から何まで出来るからというにある」（北海タイムス、昭和 9 年 12 月 14 日）

社史は開業直後の 12 月 16 日日曜日（友引）には 6 組の結婚式があったと記している。新聞記事はかなり極端な表現をしているか、当時は札幌でのホテルでの結婚式が目新しかったのであろう。当時の世相としては十分な意味があるとしても、その後のホテルでの結婚式に関する記述が皆無であることは、ホテルにとって結婚式の重要性が低いことを物語っていると考えてもいいのだろうか。

＜リーガロイヤルホテル＞

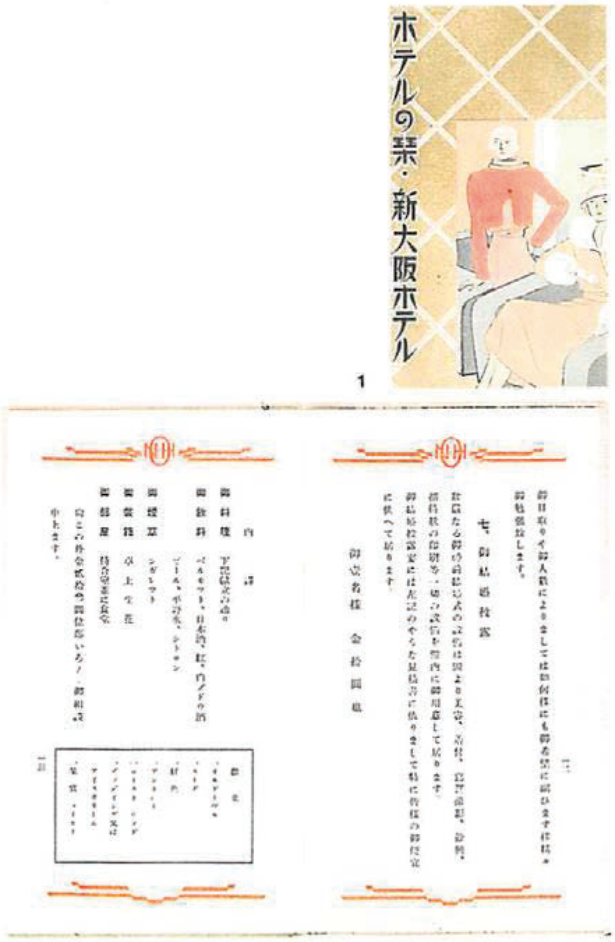
リーガロイヤルホテルは昭和 10 年 10 月 16 日に「新大阪ホテル」を前史として大阪中之島に開業されたクラシックホテルである。社史の『リーガロイヤルホテル７０年の歩み』（平成 17 年）には「ブライダル・祝宴 70 年」というチャプターが設けられている。チャプターといっても 4 頁ほどで、昭和 10 年から平成 17 年までの写真がかなりの枚数挿入されている。下図は昭和 10 年代前半に新大阪ホテルの大宴会場で行われた結婚披露宴である。参加した女性の大半はすべて黒留袖である。中央上部左に新郎新婦と仲人が立っている。総勢で 200 人ほどの大規模な披露宴であるが、主催者の名前等は記されていない。

ホテルは、「自由な発想と先取の気風」の説明にキャンドルサービスとブライダルエスコートを記している。キャンドルサービスはリーガロイヤルホテルで始まったわけではないが、そう言われることがあるという形での紹介である。「ブライダルエスコート」は平成 8 年に始まったという。平成 12 年からは「人前式」も実施した。



社史には昭和 10 年当時のホテルの栞が掲載されているが、当時の結婚式の様子がわかる。栞の右側は文字を読めるように起こしたものである。

栞に見られる「御壱名様　金拾圓也」は現在のほぼ 2 万円である。



御日取りや御人数によりましては如何様にも御希望に副ひます様精精御勉強致します。

七、御結婚披露

壮叢なる御神前結婚式の設備は固より美容、着付、寫眞撮影、餘興、招待状の印刷等一切の設備を館内に御用意して居ります。

御結婚披露宴には左記のような見積書に依りまして特に皆様の御便宜に供えて居ります。

御壱名様　金拾圓也

内訳

御料理　下記献立の通り

御飲料　ベルモット、日本酒、紅、白ブドウ酒、ビール、平野水、シトロン

御煙草　シガレット

御袈〇　卓上生花

御部屋　待合室並に食堂

尚この外金弐拾参圓位迄いろ々御相談申上ます。

献立

一、オルドーブル

一、スープ

一、鮮魚

一、アントレー

一、ローストサンド

一、プディング又はアイスクリーム

一、〇實　コーヒー

＜ホテル・ニューグランド＞

ホテル・ニューグランドは、関東大震災によって大きな打撃を受けた横浜に大正 15 年に設立された。同ホテルには『ホテル・ニューグランド 50 年史』（1977 年）と『ホテル・ニューグランド八十年史』（2008 年）があるが、『ホテル・ニューグランド八十年史』に「スカイチャペル建設」の記事が掲載されている。

ホテルでは新館建設時（平成 3 年）に 4 階に祭壇付きチャペルを建設し、日本式（神式）、ガーデン挙式の三式場を設けた。「しかし、その後、挙式の流行・形式が大幅に変わり、神式挙式の激減とチャペル挙式への移行、新設ホテルのチャペルの高級化に伴って、従来のチャペルではとても顧客の要望に対応できないと判断し」、18 階屋上に設置されていた夏期用屋上プールを撤去して新チャペルを平成 10 年に建設した。

社史には婚礼客はもちろん一般客からも高い評価を得て「競争が激しさを増す中で一時低下気味だったが復元した」（『ホテル・ニューグランド八十年史』181～182 頁）と記されている。建築費用は 3 億 7 千 8 百万円である。

現在のスカイチャペル

＜ホテルオークラ＞

一般的に言って、帝国ホテル、ニューオータニ、ホテルオークラでの結婚式は高級である。それにもかかわらず、社史には結婚式に関する記述がほとんど見られない。わずかに 1970 年代にパッケージ商品が花盛りになり、ホテルオークラでも正月パック・ディナーショーで成果を上げたが、「婚礼についてはパッケージ商品は一貫してつくらず、”手づくりのブライダル”ディプロマポリシーホテルのイメージを一段と高めることに成功している」（『ホテルオークラ』1988 年、224 頁）と記すだけである。当然ながら現在に至るまで、ホテルオークラは『ゼクシィ』をはじめ、ブライダルに関するホームページを運用している。

＜新阪急ホテル＞

新阪急ホテルは東京オリンピックや東海道新幹線開業の昭和 39 年に大阪・梅田に開業した。社史である『新阪急ホテル２５年史』（1992 年）には 1970・80 年代のブライダル事業に関する説明が記載されている。他の社史と比較するとある程度まとまった記述である。

同ホテルの昭和 54 年の宴会部門の部門別収入の割合は 20.6 パーセントで、宴会部門におけるブライダル関係の比重は大きかったという。昭和 39 年に 530 組だった結婚披露宴は昭和 46 年には 1,000 組を突破し、昭和 49 年にピークの 1,344 組に達した。その後減少に転じたが、ブライダルマーケットの縮小と大阪地区における大型都市ホテルの開設に伴う顧

客の争奪戦の激化（第 4 次ホテル建設ブーム）によるものであった、と記している。

新阪急ホテルがとった対策は三点である。昭和 55 年に阪急系のホテル、阪急電鉄、阪急不動産とともに阪急百貨店内にブライダルサロンを開設した。結納、挙式、披露宴からハネムーン、新居づくりまで一貫受注を目指したものであった。二つ目はホテル館内における婚礼展示会の強化で年 4 回の開催とした。三点目は料理の開発で、和洋折衷料理「高砂」を販売した。業界に先駆けた開発で現在では婚礼料理の約 6 割を占めるまでに成長したと記されている。

さらに昭和 61 年には第 3 次改造計画委員会が設置され、婚礼関係設備の充実が図られた。建物の構造的問題を解決してブライダルサロンを設けるとともに、小宴会場の増設を行って結納式の利用や少人数単位の顧客獲得を図った。ホテル側としてはすでにこの時点で結婚式の小規模化を実感していたのかもしれない。他にも昭和 61 年 8 月から婚礼セールス強化策の一環として「婚礼総セールス運動」が実施された。社史には 6 ヶ月間で 21 件の予約が成立したとして成果が記載されているが、その後マンネリ化し平成 2 年には新機軸が検討中とされている。

婚礼和洋折衷料理「高砂」

●神式結婚式場

●キリスト教式結婚式場

＜京都ホテル＞

京都ホテルはクラシックホテルであるが、社史『京都ホテル１００年史』（1989 年）が著名人の寄稿を中心に構成されているために、京都ホテルにおける結婚式の動向はほとんどわからない。

左の広告は京都新聞（1970 年 3 月 13 日）に掲載したもので、同書に収録されている。説明はない。

井上靖は寄稿の中で、昭和 10 年に京都ホテルで結婚式・披露宴を挙げたことを述べている。島津製作所会長

（当時）の上西亮二は昭和 8 年に平安神宮で挙式した後京都ホテルで披露宴を行った。そして一般的結婚式の動向として昭和 32 年頃からホテルでの結婚式やパーティー・宴会が増え始めるなど、ホテルでの結婚式の大衆化が促進された（282 頁）と述べるだけである。社史の冒頭のグラビアも天皇陛下の来館から始まり、館内の写真として掲載されているもので関わるのは大宴会場しかない。

＜東急ホテル＞

社史に結婚式に関する記載が多く見られるのが、すでに見た新阪急ホテル、東急ホテルと帝国ホテルである。東急ホテルの社史『東急ホテルの歩み』（1990 年）には、東急ホテルグループ傘下のホテルが掲載されている。

銀座東急ホテルでは、開業当初から婚礼獲得を重点施策としていたという（36 頁）。開業時の昭和 34 年当時と思われるが、ホテル内に結婚式場、写真場、貸衣装室を設け広く一般にホテルの婚礼を PR したのは「同ホテルが初めて」（35 頁）という。婚礼披露宴にターンテーブルを使った中華コースを考案して爆発的な人気を呼んだこともあると記されている。

業界初の試みとしてパッケージウエディングを打ち出し、披露宴の料理、衣装、写真をパックにして売り出した。「経済性と利便性が人気を呼び、この年の婚礼は 400 件を数えた。」（36 頁）引用文中の「この年」が何年に当たるのか、文章からはわからないが、開業して間もない頃と推測される。

社史には興味深い記事が見られる。芸能人の結婚式である。「同ホテルの知名度を一気に高めた」と表現されているのは昭和 36 年 11 月 27 日に挙式した中村錦之助と有馬稲子の結婚式だった。披露宴に著名人千人が招待され、1 階は報道関係者とファンでごった返したという。

昭和 38 年には「ハネムーンプレゼント」と称して、白馬東急ホテル、下田東急ホテルに無料招待付婚礼を発売した。その結果、婚礼件数は 581 件になったという。昭和 40 年には挙式からハネムーンまでの費用を含む「新パッケージプラン」が発売された。コロムビア・トップ・ライトや大平透といった芸能人が司会を担当し、招待客 50 人で 19 万 5 千円と格安であったために人気を博し、婚礼件数は 659 件に急進した。さらに翌 41 年には 745 件に達した、と記されている（37 頁）。

先にも述べたように、『東急ホテルの歩み』は傘下のホテルを個別に記述している。個別の記述の中にも結婚式に関する記述が散見される。しかし、個々のホテルの担当頁はわずかであり、当然ながら結婚式に関する記述も限定的である。横浜東急ホテルでは「結婚式場は近代建築と日本調のアクセントに彩られ」と施設の説明と 1 日 4 組が限度の宴会場の問題（43-44 頁）、博多東急ホテルでは、結婚式主体の宴会場使用から多目的利用へ（82 頁）、大阪東急ホテルでは、梅田周辺のホテルの新設や結婚式場の開設による婚礼の減少を一般宴会でカバー（141 頁）、鹿児島東急ホテルでは、昭和 60 年に発表した披露宴での新料理が人気で披露宴の 70 パーセントを占め婚礼件数も毎年 200 組を確保（151 頁）、岡山東急ホテルでは、婚礼予約が開業 1 年間で 300 件を超えた（161 頁）といった具合であ

る。

東急ホテルグループはグループ全体で結婚式を始めとした商業戦略を立てている。結婚式関係に関しては「東急ウエディング・パック」と「東急ウエディングパック・ジューンブライド･ハワイ」に関する記述が記載されている。昭和 45 年 1 月 1 日、ハワイ、グアムへの新婚旅行の急増に着目して、挙式、披露宴、海外ハネムーンを一括セットにした「東急ウエディング・パック」を発売した。婚礼では神前挙式、美容着付け、案内状、写真、控室がセットになっており、披露宴ではお好みの料理とシャンパンが自由に選べるようにした。着席、立食が選択でき、ウエディングケーキ、卓上盛花、席札、メニューも用意した。ハネムーンは 4 泊 6 日のハワイコースと 3 泊 4 日のグアムコースが選べた。

「東急ウエディングパック・ジューンブライド･ハワイ」は昭和 54 年の大阪東急ホテルの開業記念商品で全ホテルでの実施商品であった。東急ウエディング・パックに日本航空のチャーター便利用による安価な航空運賃と組み合わせることで、平日やシーズンオフ停滞を打破しようとしたものだという（202 頁）。

＜帝国ホテル＞

先に帝国ホテルでの披露宴、挙式一体型の開発については言及した。ここでは戦後の帝国ホテルでの結婚式について社史を精査してみたい。

社史の戦後の部分で初めて「結婚式」が登場するのは昭和 38 年のことである。5 月に職員に真性赤痢が現れ、結婚披露宴の出席者 1 名も罹患したという記述である。結婚式に関するまとまった記事が現れるのは昭和 57 年のことである。つまり、終戦を迎えた昭和 20 年から 57 年まで結婚式に関する記載は見送られたということになる。

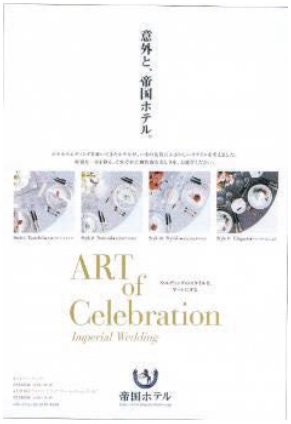
昭和 57 年の記事であるが、本館改修を機にそれまで 2 階中央部に位置していた「宴会レセプション」を同じ 2 階ではあるが 1 階フロントの真上に移設した。落ち着いた雰囲気の中での相談やプライバシーを配慮して広さを 2 倍にし個室も複数室設けた。テレビを設置してモデル結婚式を参考にするためのビデオコーナーも設けられた。社史ではさらに、宴会レセプションを含めた中 2 階を「ブライダルフロア」として「婚礼に関するすべての機能を集中してこのフロアで用件をすべてすませることができる」（『帝国ホテル百年史』798 頁）ようにした。帝国ホテルの宴会場利用では結婚式・披露宴が全体の 40 パーセントと重要な部分を占めていたためであったと記されている。ブライダルフロアに設けられたのは、「貸衣装、着付けの遠藤波津子きものさろん」、「引き出物の高島屋引出物承り所」、「ハネムーンの阪急交通社」である。

以上の記載の後に「商品企画力を高める」というチャプターが設けられていて、小見出しに「ブライダル市場へ帝国ホテルの提案」が掲載されている。昭和 50 年からの結婚式に関する数値が示されている。昭和 47 年に全国で年間 110 万件あった結婚件数が昭和 61 年には 71 万件に落ち込む。それにもかかわらず帝国ホテルの婚礼受注件数は増加した、という趣旨である。

婚礼関係数値の変化

年度(昭和)	婚礼受注件数	売上高(万円)	宴会部門売上高(万円)
55			738,900
56	941		817,600
57	1,051	381,700	922,100
58	1,108	434,100	1,070,500
59	1,035	446,700	1,140,100
60	976	465,200	1,254,900
61	960	485,300	1,277,600
62	1,044	543,300	1,425,700
63	1,161	640,500	1,517,100
平成元年	1,177	655,500	1,612,300

帝国ホテルは昭和 62 年に「クラシックウエディング」の実施を提案する。当時、「演出の過剰や良識を超えた贅沢さ、列席者を無視した進行、心の通わない披露宴のショー化に批判の声」があり、帝国ホテルの格式により「両家も列席者も満足できる心のこもった結婚式・披露宴を心がけること」（811 頁）を基本理念としたという。ただ、具体的な内容はいまひとつつかめない。流行に流されない、感謝の気持ちが素直に伝わる、婚礼の原点に返るが「クラシックウエディング」の趣旨である。二人の「個性」を生かすことに全力を挙げて協力する、ということで、披露宴で新郎新婦が中央テーブルに着席し、来賓がその周りを囲む席を設けて好評だったと記している（811～812 頁）。



以上が『帝国ホテル百年史』（1990 年）に記載されている結婚式関係の記事であるが、後に刊行された『帝国ホテルの 120 年』（2010 年）には以上の他に 2004 年から始められた「新婚礼プラン「アート・オブ・セレブレーション」」が記載されている。

「2004 年 9 月、帝国ホテルはウエディングが変わります。現代の若い女性に支持されるような、まったく新しい 4 種類のテーブルコーディネートが誕生しました」が謳い文句である。基本を統一したコーディネートで披露宴を行うというもので、「テイストフル」「ナチュラル」「スタイリッシュ」「エレガント」の 4 種類が設定された。オーナメントプレート、テーブルクロス、チェアベルト、ウエディングケーキ、パンフレット、花にいたるまで統一性を持たせるプランであった。他にも、イミテーションのウエディングケーキを新デザインし 4 種類を揃えるといった細部までのこだわりを見せた。

さらに 21 世紀プロジェクトの一環として平成 17 年にチャペルの改修を行った。チャペルの前方の祭壇部分の天井を吹き抜けとしバージンロードを赤い絨毯から白い大理石張りに変更した。チャペルの様子は、現在も変わっていない。興味深いのは、この間に 2 室用意されていた神前式挙式会場のひとつが宴会場に変更され、神式が 1 室になったことは記されていない点である。

平成 21 年には「Formal is Romantic」をテーマにした新婚礼プラン「インペリアル・ウエディング」を発売した。現在も帝国ホテルのウエディングは「インペリアル・ウエディング」である。10 年近くプランは変わっていないことになる。

箱根富士屋ホテルのブライダル戦略から見えるもの

ホテルの社史の分析の最後に、異例のリポートを取り上げたいと思う。ホテレスウエディング編集室編『箱根富士屋ホテル結婚伝説(ブライダルストーリー)』は書名の通り、箱根富士屋ホテルでの結婚式をメインテーマとして作成されたノンフィクションである。登場人物はすべて実名で巻末には写真も掲載されている。箱根富士屋ホテルには小学館ノンフィクション大賞を受賞したことのある山口由美による『箱根富士屋ホテル物語』がある。本レポートでは、他のホテルに関してもこの種の本はとりあげなかった。しかし、『箱根富士屋ホテル結婚伝説』の帯にあるように、「箱根の超老舗ホテルが挑んだブライダルビジネスの成功法　7 年間で業績が 8 倍に！」なった経緯をドキュメンタリータッチで描いた本である。成功への途中過程で、ホテルにとってブライダルがどのようなものなのか、何が阻害要因となっていたかがはっきりとではなくとも理解することが出来そうである。ただ、書名と内容からしても、富士屋ホテルがある種の PR のために作成したものであろうことはわかる。編集を担当したとされる「ホテレスウエディング編集室」はこの著作以外の仕事をしていないようである。

この本は箱根富士屋ホテルのブライダルに関する本であるが、主人公がいる。現在副支配人の真野浩明である。昨年 11 月に真野の母校で行われた講演会のパンフに不必要なくらいの詳細な経歴が掲載されている。参考のために掲載しておく。真野は富士屋ホテルに入社して数年後、ブライダル事業を開拓して今日にいたった人物である。

2002 年の箱根富士屋ホテルの年間ブライダル数は 50 組だった。2010 年にブライダル数は 8 倍の 400 組になった、というのが『箱根富士屋ホテル結婚伝説(ブライダルストーリー)』の内容である。それは以下の真野の略歴を一読してもらえば十分に理解できる。

【 経 歴 】

1973 年 東京都出身。幼少期は、両親の仕事の関係で、当時イギリス領であった香港で家族と共に移り住み自由に素直に育つ。性格は、極めて明るく大らかな性格。常に物事を前向きに捉え、プラス思考で積極性と向上心旺盛。学級委員や応援団長、大学バスケットボール部主将、スイミングインストラクター等、常にリーダーシップの学生生活を送る。

●1996 年入社 総務課配属後、社内選抜で一人、１年６ヶ月に渡る「海外ホテルマネジメント研修」に於いて、Hawaii Sheraton Hotels で、ホテル運営研修を経験。海外のホテルマネジメント手法、ビジネス感覚、国際文化は勿論、英語力も習得するなど、国内外様々なチェーン傘下ホテルの管理部門や営業部門を経験。

●2000 年 10 月～ 料飲課 副主任 ： 育成トレイナー ⇒ キャプテン ⇒ 料飲マネジャー（MG）を務め、模範となるべく、ワインエキスパート、および、ソムリエ資格を取得。

●2003 年 1 月～ 宿泊課 主任 ：フロント MG ⇒ 企画 MG ⇒ 広報 MG として管理監督

●2003 年 10 月～ 宿泊課 係長 ：婚礼 MG 同課のリーダーとして、フロント管理を行う傍ら、婚礼 MG を兼任し、Master of Bridal ファイナリスト受賞、業界紙ブライダル MG 部門全国 1 位に輝く。分析、戦略、育成による「集客と受注オペレーション」の強化を行い、毎日が挑戦と改革の連続となる。当初、例年 50 組足らずの婚礼において、着任後、戦略改革を行い、翌年 100 組超に成功。毎年着実に実績を上げ続け、100 組から 150 組へ上昇

●2008 年 12 月～ 婚礼宴会課 課長（部下 20 名）

200 組を超え、社内にも動きが出て婚礼宴会課を創設、事業立上げ。課を率いて奔走し、いよいよ 300 組を突破、需要に合わせ婚礼各施設（挙式会場・披露宴会場）を創設、全国から偵察が来る。400 組に到達するとその過程が評価され、テレビ、メディア、新聞等の取材、更に、主人公としてその軌跡を辿った書籍 『結婚伝説』 が出版される等、ホテルのブランド力 UP に貢献。全国各地の業界、団体、企業の講演依頼にも応える。ついに、誰も夢にも思わなかった組数・売上共に 10 倍増で年間 500 組超・売上高・・億円超を達成。婚礼一人当たり単価 6 万 5,000 円へ大幅に向上させ、名実ともに日本一の婚礼売上上昇率を記録し人気ホテルに変貌。全国にホテルの名前を知らしめた。

●2009 年 9 月～ 婚礼宴会課 兼 総合予約課 課長（部下 40 名）

※宿泊予約部門 ・料飲予約部門 ・婚礼宴会部門の統括

課長職でありながら、総合予約課も兼務で任され、宿泊部門や料飲部門の商品改革・ホテル HP 改革・予約一括管理システム導入・OTA 倍増・集客チャネル倍増・収入源多角化・異業種コラボ企画・インバウンド強化・SEO 対策・レベニューマネジメントを実施。実績として、宿泊単価を維持しながら、年間宿泊稼働率 90%売上高・・億円（前年比１２５％）を達成し、ホテル収益バランスの改善に成功

●2009 年 12 月～ 婚礼宴会課 兼 総合予約課 兼 本社ブライダル事業本部 統括課長（部下 70 名）親会社社長勅命で本社にブライダル事業本部を創設し、富士屋ホテルチェーン全体の統括責任者として戦略ノウハウの波及と事業運営・管理を任され指揮を執る。運営戦略（方針目標設定・事業計画立案・マーケティング・データ分析・戦略テーマ設定・ブランディング・企画広報・商品造成・施策展開・集客販促・受注オペレーション改革・レベニューマネジメント・人材育成指導・チーム作り・社内調整・会議体策定等）に至る業務を徹底。オーナーとの折衝や、各ホテル総支配人と月例「婚礼戦略会議」を実施、獲りに行く戦略を推進、施策展開システム導入し管理監督する事で、全ホテルの婚礼売上上昇に成功。チェーンの婚礼部門実績として年間組数１,０００組超・年間売上・・億円超達成

●2010 年 6 月～ 副総支配人就任 兼 本社ブライダル事業本部 統括次長（部下 260 名）

※富士屋ホテルチェーンブライダルスクール 校長 兼務ホテル再生とブランド力を広めた実績が認められ、歴代最年少で富士屋ホテル副総支配人に抜擢。実質、ホテルの経営と運営全般を任される。運営推進力・管理マネジメント力・人材統率力を発揮。「人間尊重の運営」で全従業員 260 名面談など陣頭指揮を執り、全員が一丸となって目標に向かって突き進む TEAM BUILDING を実施。ホテル横断マルチタスク化、管理部門および営業部門の戦略会議を倍増、社内連携業務の調整、外販事業拡大、施策展開表の実行、ヒト・モノ・カネ・情報をマネジメントし PL 管理を徹底。結果、同ホテルは集客・売り上げ共に隆盛を極め過去最高売上・・億円記録達成。また、ホテルチェーン全体の婚礼事業を統括。「ブライダルスクール」を創設し、校長に就任。組織力を強化させ、そのノウハウを社内教育、人材育成に注力し、ブライダルマスターを次々と輩出。具体的実績としては、全社売上・・・億円の内、兼任した（本社事業部・本店富士屋ホテル）で年間・・億円稼ぎ、責任とやりがいの中、10 年以上に渡り、会社に利益と人気を集める事に貢献

●2014 年 4 月～ 本社営業本部 ブライダル事業部 婚礼事業統括（部下 70 名）その後、筆頭株主の外資サーベラスが撤退、株主が国際興業（株）に転換し、社長含む経営陣の交代、経営方針変更となる。事業予算策定・全チェーン婚礼会議、ブライダルスクール、全国各地で基調講演

●2015 年 9 月～ 湯本富士屋ホテル 婚礼宴会課次長として婚礼・宴会・企画・広報・営業セールスを統合し、課の創設

●2018 年 4 月～ ２年間の富士屋ホテル耐震工事に伴い、本社管理本部付で株式会社ホテル・ニューグランドへ出向し、現在に至る（立教大学での講演　令和元年 11 月 30 日）

同書は真野の仕事について、「カップルが喜んでくれることを誠心誠意、一所懸命になってとことんする。突き詰めれば、それだけだった」（73 頁）、「「婚礼組数の減少」や「少子化」など、悲観論の雲がブライダル業界を覆い始めていたにもかかわらず、信念を熱く語る情熱が世情にも勝ったのだ」（76 頁）とほめそやす。『週刊ホテルレストラン』の副編集長が箱根富士屋ホテルのブライダルの盛況ぶりに興味をもってインタビューに訪れるが、「当たり前のことばかりだ」（178 頁）と驚くことになったというエピソードも掲載されている。真野のプラス思考、実行力が婚礼組数を増やしたと主張しているようだ。

しかし丹念に読んでいくと、いくつかの疑問が浮かび上がってくる。興味深いのは、組織として各部署の協力を得るのが難しかったと繰り返し書かれている点である。組織が縦割りで、宿泊は宿泊部、調理は調理部というように、それぞれの予算や収益の目標値があって、仕事が横断するブライダル係の権限はほとんど存在しなかった。ブライダル係は宿泊課の一係に過ぎず、客のニーズを満足させるには係が他の部署へ頭を下げてお願いに行くのである。与えられたスペースもきわめて狭小で、人数も真野と岡部のふたりの時期が長かった。こうした人的配置や設備の問題は、従業員の「やる気」とは別のものである。

外部業者との関係改善も大きな問題なのがわかる。『箱根富士屋ホテル結婚伝説（ブライダルストーリー）』では、真野の情熱や人柄にほれこんで、ホテルに出入りしている写真、生花、衣装などの専門業者が従前よりもより協力的になっていったとか、正社員か協力店かの区別無く富士屋ホテルのブライダルが盛んになるように協力するようになったと記されているが、そうしたきれい事ではない利益や人間関係も存在したにちがいない。そうした実体は記されておらず分からないが、協力店の問題がホテルでのブライダルに大きな比重を占めていることは理解できる。

婚礼組数が 200 組を超えた平成 19 年、取締役総支配人が交代した。総支配人は、営業連絡会議の冒頭、「これからの富士屋ホテルは、ブライダルだ！」と宣言し方針を明確にする（155 頁）。組織としての体制が変わることで、ブライダル事業は進展していく。係から課に昇格し、所属する従業員が増えたのは、真野のやる気とは別物である。

富士屋ホテルは、1878 年（明治 11 年）に山口仙之助が藤屋旅館を買収して開業したのを初めとする。戦後の昭和 41 年、富士屋ホテルは国際興業グループに株を譲渡し、国際興業の社長であった小佐野賢治が会長に就任する。これによって創業家の山口一族による経営は終わったことになる。国際興業は平成 16 年、5,000 億円超の負債で経営危機に陥り、海外の投資ファンドであるサーベラス・キャピタル・マネジメントに買収される。真野が富士屋ホテルに入社したのは平成 8 年でブライダル･マネージャーに名乗を挙げたのは平成 15 年であった。そして、国際興業の経営は平成 26 年に国際興業ホールディングスの傘下へと戻った。富士屋ホテルは傘下のグループとして親会社である国際興業の影響を受けてきたことになるが、どのような制約や経営方針があったかはわからない。

おわりに

ホテルにおけるブライダルの位置づけが曖昧なのではないか。ホテルが主導したブライダルに関する先駆的なアイディア商品はほとんどないのではないか。たしかに東急ホテルや新阪急ホテルなどがブライダルに力を注いでいる様子はよく理解できた。しかし、パック旅行にしろ、ブライダルフェアにしろ、独自開発というよりは追随ではなかったかと思

われるのである。

ホテルは現在に至るまで何度かのブームを経験している。第一次ブームは昭和 39 年の東京オリンピック開催を契機としたものである。国際観光事業の振興をめざした政府が政策的にホテル投資を促進し、首都圏を中心にホテル・ニュージャパン、銀座東急ホテル、東京ヒルトンなど多くのホテルが建設された。ホテルの規模が大型化し、私鉄企業がホテル経営に参入した。日本人がホテルを利用するようになるのもこの頃と考えられる。

第二次ブームは大阪で万国博覧会が開催された昭和 45 年頃である。ホテル規模はさらに大きくなり、本格的なチェーン展開が始まった。万博後は個人旅行の振興を目的にディスカバージャパンのキャンペーンがなされるなど、旅とホテルの利用が促進された。

その後もホテルの高層化、外資系高級ホテルの参入など何度かのホテルブームがあると指摘されている。ホテルは、単にブライダルの動向だけで資本を投下して施設を改良したり、絶えず料理の構成を変えるというわけにはいかないのかもしれない。

近年ホテルでの結婚式の割合が増加しているが、ホテルでの増加は、「ホテル」の総合的な豪華さやブランドに起因するものではないか。結婚式に特化した建物のイミテーションっぽさの忌避と本物志向が、結婚式を挙げようとするカップルに訴えかけているように、数多くの社史を見ながら、思えるのである。戦後のホテルでの結婚式は、社会状況や経済的背景を基盤にして、確かにホテルは多くの選択肢を提供はしたが、個人（カップル）が選択していったものにちがいない。